

(古谷先生のレクチャーを伺って、その中に2点関心の持つところについて素朴な感想を述べさせていただきます。)

「フィクション」と「現実」をめぐって

3月4日レクチャーのレポート

東京大学工学部 趙齊

2016.03.07

1. 二次創作：「フィクションに基づくフィクション」

アニメという「フィクション」の中にさらに展開される虚構世界の「フィクションの中のフィクション」という話は、同人創作、広く言うと二次創作のことを想起させた。「フィクション」と「現実」の語彙を使って二次創作のことを考えると、「現実」に基づいて「フィクション」を作るのが「一次」創作であり、その「フィクション」に「現実」かのように基づいてさらに「フィクション」を作るのが「二次」創作、といえるだろう。ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』がないとダリの『モナ・リザ』が現れられないように、二次創作＝「フィクションに基づくフィクション」は一次創作の「フィクション」を前提に存在している。一方、「フィクション」に内包される「フィクションの中のフィクション」と異なるのは、二次創作は一次創作と独立する過程であり、「フィクションに基づくフィクション」は一次創作の「フィクション」がなくてもある程度楽しめられることができることである。森永あいの『山田太郎ものがたり』は、本人の『スラムダンク』の同人創作を原型にしたことが好例である。

ただ、「フィクション」が人間の脳によって自由自在に作り出されるものであり、言葉で表現できないものさえ含まれていることがある以上に、「フィクションの中のフィクション」であろう、「フィクションに基づくフィクション」であろう、この無限なものを追究することに学術的な方法と意味を、私はまだ理解していない。

2. SNS：「現実」か「フィクション」か

SNSの日常生活での広がりによって、「フィクション」が衰えつつあるという話になっていたが、「フィクション」が衰えているのではなく、今までのどの媒体よりも「現実」に近いかたちでSNSに現れていると私は思う。少し前までに、人々がドキュメンタリーに映されるものが「現実」であると勘違いして、その中に「フィクション」が隠されていることを忘れていたように、今の人々がSNSにアップされる文字、画像、映像が「現実」そのものであると思い込んでいるのであると考えられる。

今の時代では情報と情報を獲得するスピードが何よりも重要視されている。そのため、従来の本やブログより、情報量が圧縮される断片的な言語、写真と映像が大量に消費されるようになっている(少なくともそうに見える)。一方、これら断片的な言語、写真と映像は誰でも、いくらでも編集できる。他人に「見せる」、「見られる」ことを念頭にSNSに情報をアップする際に、アップする人はそうと意識していないかもしれないが、自分に関する「物語」を作り上げていて、また、その情報をみる人もそうと意識せずに「物語」を消費しているといえる。これらの「物語」の中で、どこまでが「現実」で、どこまでが「フィクション」なのか、非常に分けづらくなっている。